あとがき

文部科学省が編集・発行している月刊誌「初等教育資料」の背表紙には，今年度４月号から３月号まで「『生きる力』をはぐくむ教育の新たな展開」というタイトルが続きました。これは，平成２０年３月２８日に告示された「新学習指導要領」の理念が「生きる力」の育成を重視し，今後も継承していくことを示したからです。

「『生きる力』の育成は，変化の激しいこれからの社会を生きるために，確かな学力，豊かな人間性，健康・体力の知・徳・体をバランスよく育てることが大切だから」と文科省の保護者用パンフレットにも書かれていますから，多くの人々が周知していると思います。百年に一度といわれる「世界不況」が，現実に起きることを予想できた人は少ないでしょう。現在進行している激変の中で，これまで人間が獲得してきた知識や技能を活用して，「世界不況」を克服し，「新たな世界」を創造することが人間の課題となっています。この「世界不況」が発生したことで，「生きる力」の育成が確かに必要であると多くの人が改めて実感したことと思います。

ここ数年，ＰＩＳＡ等の国際調査で，日本の子どもたちの読解力や学習意欲の低下などが問題点としてあげられています。私たち教師は，日々の授業や学校教育の中で子どもたちに「生きる力」をつけるために実践を重ね，基礎基本の習得と活用によって，思考力・判断力・表現力を育て，学習意欲を高める取組が進められ，成果も現れています。

さらに，「生きる力」を育成していく上で深刻な問題として捉えるべきことは，2007年にユニセフが発表した調査結果です。これは，ＯＥＣＤ加盟２１ヶ国の青少年の幸福度調査で，１５歳の子どもが「孤独を感じる」と答えた割合が日本は２９．８％であり２１ヵ国中最高でした。次に高かったアイスランドが１０.３％，その他の国は２.９～１０パーセントですから，日本は他国よりずば抜けて高い割合です。日本は，「心が孤独で自己肯定感に満たされていない」子どもたちが多いといえます。子どもが「孤独」を感じる環境の学校になっていないか，また，自己肯定感をもてないのはなぜか，私たち教師は考える必要があると思います。なぜなら，「生きる力」の中に「自分とは異質な人とうまく関わり合う能力」や「自立して行動できる能力」が含まれているからです。フィンランドのＰＩＳＡ型学力が高い背景には，社会構成主義の学習支援の考え方があります。これは，学習の「競争化」ではなく「共同化」の方向性重視と「ちがう個性を持った同士ができることとできないことを補い合って一緒に上がっていく」という考え方です。人との関わりの中で個性や能力を磨き，互いに支え合って共に伸び，社会を支えていける人間の育成こそ「生きる力」の育成の根源であると思います。

百年に一度の「世界不況」に目が奪われることなく，教育は「百年の計」として，百年後を見据えた教育実践を地道に進めていくことが，今の我々教師に課せられた使命であることを忘れてはいけません。

終わりになりましたが，「東山梨教育研究第４７号」の発刊にあたり，お忙しい折に玉稿を賜りました山梨市教育委員長様，並びに東山梨教育協議会長様をはじめ，貴重な原稿を寄せられた諸先生方，各市教育委員会の財政面でのご援助に対し心より感謝申し上げます。

本冊子の表紙は教育協議会「図工・美術部会」の小澤朋子先生(「Team と自画像」 山梨南中学校３年中村輝さん作）にお願いいたしました。ご協力ありがとうございました。

【編集員】

山梨市教育委員会教育長	堀内　邦満
甲州市教育委員会教育長	古屋　正吾
峡東教育事務所長	内藤　義仁
峡東教育事務所指導主事	小林　誠一
東山梨教育協議会事務局次長	久保田英樹
東山梨教育協議会研究推進委員長	中村　英彦
山梨支会研究推進委員長	齊藤　和裕
山梨支会研究推進副委員長	志村　克人
甲州支会研究推進委員長	三枝　敏明
甲州支会研究推進副委員長	三枝ゆかり

発行日	平成２１年４月６日
発行責任者	東山梨教育研究編集実行委員会
編集責任者	東山梨教育研究編集実行委員会事務局
印刷所	昭和堂印刷